

新竹市との姉妹都市交流

萩原 はぎわら
誠司 せいじ
● 理事・元岡山市長
法政大学教授



私は岡山市長在任中、それまで中華人民共和国一辺倒であった岡山市の対外関係を他のアジア諸国に拡大する機会に恵まれた。平成十五年四月の台湾・新竹市との友好交流協定がその眼目であった。「日台共栄」誌に貴重な紙面をいただいたので、この友好交流にまつわる、いくつかの出来事を照会したい。

【洛陽市との交流】 中国河南省洛陽市と岡山市は、昭和五十六年から姉妹都市関係を結んでいた。平成十一年に岡山市長になり、洛陽市との交流を受け継いだ。なぜ岡山市と洛陽市が姉妹都市なのか、その意味を理解しかねていた。

調べてみると、中国政府からの姉妹都市縁組の打診を日本側が受け入れたものであった。その背景は、日華事変において、岡山に本拠を置

く旧陸軍の歩兵第百十連隊が洛陽攻撃の主力であり、最終駐屯地が洛陽であったことが、中国側の相手選びの根底にあることがわかった。中国外交の戦略性がここにも隠されていた。

【新竹市との交流の発端】 中国サイドに日本の「弱み」を握っておこうとの意図があるとするば、われわれも戦略的に対応するの必要を感じ、その戦略の要諦は、台湾の都市との交流であると確信し、準備に取り掛かった。

そのひとつは、中日共同声明や中日平和友好条約の精査でした。岡山市が得た結論は、台湾との関係を岡山市が構築することは、声明・条約に違背しないということであり、この点は、日本外務省の条約局にも確認を取った。もうひとつは、適正な相手を見つけることで、いくつ

かの候補を市議会と相談しながら検討し、新竹市を選ばせていただいた。

【洛陽市への事前通告と了解】新竹市との関係が構築され、協定締結が視野に入った段階で、親書を劉典立・洛陽市長に送付した。

洛陽市に事前にこのことを通告し、併せて、声明・条約に違背しないことを知らせたものであるが、当時の洛陽市は、われわれの立場を理解し、同市として了解し、通告に感謝するとの連絡があった。

【中国外交部の激怒】その後、洛陽市当局から積極的に北京に連絡したかどうかははっきりしないが、唐家璇・外交部長が洛陽市に対して激怒しているとの情報が入った。曰く「洛陽は、自分が日本担当のころ心血を注いで選定した縁組の意味を理解していない。岡山の連隊に攻められたことを、この際まさに持ち出して、岡山を思いとどめさせるべきである」

これを受けて洛陽市が前言を翻し、新竹市との交流協定をやめて欲しいと連絡してきた。また、在京中国大使館の書記官が私に接触してき

て、「外交部長の顔に泥をぬるようなことは、やめてくれ。あなたのためにもならない」と伝えに来た。

【日本国内でのプレッシャー】洛陽市及び在京中国大使館からの要請を丁重にお断りした段階で、岡山にゆかりの政治家お二人、橋本龍太郎さんと片山虎之助さんから「萩原君、暴走はいけない」とご忠告をいただいた。これに対して「声明・協定に違背しないことは、外務省にも確認済みです。日本の将来を考えたとき、台湾との正式な交流を持つことは、死活に関わる重要性があると思います。また、アメリカのいくつかの都市も中国、台湾の両方と交流をしており、これを中国も認めています」と、これも丁寧にお断りさせていただいた。

【台湾での高い評価】新竹市及び台湾の行政院は、この一連の状況をよく理解し、岡山市の対応を非常に高く評価した。

その後の交流の実態もしっかりしたものであり、また、私が市長を辞して後も、折に触れて連絡をしていたいただいている。